

マーケット概況（2020年2月）

2月の債券相場は、新型コロナウイルスの感染拡大に対する懸念が高まったことから、買い先行で始まり、10年357回債は-0.075%で取引を開始した。4日の10年債入札を無難に通過した後はリスク回避姿勢の緩和に伴い、債券市場は次第に売り優勢となった。6日の30年債入札は投資家の需要もあり無難な結果となったが、リスクオフの巻き戻しを背景に債券売りの流れは変わらず、10年357回債の利回りは一時-0.015%まで上昇した。しかし、中旬以降は中国以外での新型コロナウイルスの感染拡大が確認されると、再び株安債券高の地合いとなり、また、2019年10～12月のGDP速報値が前期比年率6.3%減と市場予想を大きく下回ったことから債券相場は堅調に推移した。しかし、21日に黒田日銀総裁が長期金利目標の短期化に言及したことを受け、長期・超長期ゾーンの金利低下は抑制され、イールドカーブはブルスティープとなった。月末にかけてはNYダウ工業株30種平均が1,190ドル安と過去最大の下げ幅を記録し、日経平均株価も一時1,000円を超える下げ幅になると、債券相場は一段高となり、10年357回債の利回りは2019年11月1日以来となる-0.160%まで低下し、高値圏の-0.155%で今月の取引を終えた。

<短国市場>

3M金利は月中旬まで業者の在庫余剰感から-0.1%前半で推移した。7日の3M887回債入札は最高落札利回りが-0.13%台だったが、その後需給が悪化したことにより14日の3M888回債、21日の3M890回債入札は-0.12%台に上昇した。月末にかけては投資家需要が見え始め28日の3M891回債入札は-0.13%台となり、セカンダリー市場では-0.200%に低下して取引を終えた。1Y・6Mは、新型肺炎の拡大懸念によるリスク回避の動きから堅調に推移した利付債や、国庫短期証券買入オペに支えられ、月末にはそれぞれ-0.225%、-0.200%台に金利低下した。

<一般債市場>

新発10年政保債のスプレッドは2ヵ月連続のタイト化が止まり、前月の水準を維持した。一方、10年地方債は月初から国債金利が低下したことや先行銘柄がタイトな起債条件となったことを受け、前月比1.0bp縮小して決定した。新型コロナウイルスの影響から株安債券高が進み、既発債はリスク回避による調整売買が見られたが、下旬に掛けて国内感染が拡がると徐々に買いを手控える動きが散見された。社債は、アイシン精機が3本立てのハイブリッド債計2,000億円を起債したことが押し上げ要因となり、5,140億円が発行された。電力債では東北電力が国内電力会社としては初となるグリーンボンドを起債し、電力会社の環境問題への取り組みに注目が集まった。

◎ 主要債券月間四本値 ◎

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#357	-0.075(3日)	-0.160(28日)	-0.015(6日)	-0.155(28日)
#356	-0.085(3日)	-0.175(28日)	0.025(6日)	-0.165(28日)
#346	-0.175(3日)	-0.280(28日)	-0.120(6日)	-0.280(28日)
#142(5Y)	-0.185(3日)	-0.265(28日)	-0.125(6日)	-0.260(28日)
#171(20Y)	0.225(3日)	0.150(28日)	0.290(6日)	0.155(28日)
#886TDB(6M)	-0.130(6日)	-0.200(28日)	-0.130(6日)	-0.200(28日)
#885-#891TDB(3M)	-0.145(3日)	-0.200(28日)	-0.120(14日)	-0.200(28日)